

○加來卯子* 樋泉淑子** 中川早苗*³(*西南女学院短大, **光華女子短大(非), *³奈良女大)

【目的】わが国では、多くの高等学校が通学服として制服を採用しているため、ほとんどの大学生は高校時に制服を着用した経験を持っている。一方、大学での通学服はほとんど私服であるため、学生の服装はそれぞれの個性や好みが反映されたものとなる。高校から大学にかけての生活環境の変化とともに、制服から私服への転換は、女子学生の衣生活行動に影響を及ぼすのではないかと思われる。本研究では高校時と大学時を比較することにより、変化したと思われる女子学生の衣生活行動について考察するとともに、それらの変化に関連する要因について検討した。

【方法】九州および関西の短期大学、四年制大学に在籍する女子学生を対象に、1999年12月、配票留置法による質問紙調査を行った。配布数450票、有効回答数436票、回収率96.9%であった。主な調査項目は高校時から大学時への生活行動および衣生活行動の変化、高校時の服装、服装に対する意識などである。

【結果】高校時より大学時において、自分や周囲の服装への関心が高くなるとともに、被服費や被服購入数が増加したと答えた者が多い。また、特に自宅外通学者に被服を自分で管理するようになったと答えた者が多い。大学入学後に染髪した者は35.1%、ピアスを装着した者は全体の23.2%であった。服装に対する意識についてファッション性、規範性への意識が高い者に衣生活行動の変化が大きい傾向が認められた。また、高校時の制服に対する意識や化粧および染髪経験の有無と衣生活行動の変化には関連がみられた。